

栗本鋤雲の函館

井田進也



〔シャルグラン街三十番地の屋敷〕

幕末も最後の年となった慶応三年（一八六七）、外国奉行のほか勘定奉行格、箱館奉行兼帯という重責（事実上の駐仏公使）を担って渡仏した栗本鋤雲（本名は鯉）は、同年九月パリに到着し、翌慶応四年正月、幕府瓦解の報に接して帰国するまで八月余の見聞を、帰国後隠棲して「曉窓残燭酒醒め夢冷むるの間」に「曉窓追録」一篇に纏めたが、一昨年九月、同書を成島柳北の「航西日乗」とともに『幕末維新パリ見聞記』（岩波文庫）に収めるに当たって、両者のパリにおける足跡を逐一辿ってみた。詳しくは文庫本の解説（「柳北

と鋤雲のパリを歩く」を参照されたいが、鋤雲がパリ滞在中の宿舎として「リウジャコフの客舎」（左岸第六区、rue Jacob）を挙げているところから、彼のパリ観察が当時ジャコブ街にあった「フランクフルト・ホテル」（二番地）「イギリス・ホテル」（三十二番地）のいずれかを拠点になされたものと長い間考え てきたが、フランス外務省の日本関係資料で鋤雲自身が日頃の交渉相手と思しきジョフロワ（Geoffroy）なる人物に宛てた書簡に自署する第十六区「シャルグラン街三十番地」（30, rue Chateaubriant）へ行ってみると、主君たる徳川民部公子のペルグレーズ街五十三番地の大邸宅ほどではないにしても、いかにも駐仏公使の公邸たるにふさわしい瀟洒な佇まいであり、してみると「リウジャコフの客舎」とは、慶応四年二月一四日（西暦三月七日）、オーストリア公使館から鳥羽伏見の戦いで幕府軍が敗れたというのは事実かとの問い合わせがあったのを皮切りに、敗報相次ぎ（洪沢『巴里御在館日記』）、諸経費節減のため公邸を引き払ってからの侘び住まいであったことが知られる。



〔ベルゴレーズ街五十三番地の
徳川民部公子の大邸宅（正面）〕

さて、鋤
雲が欧米列
強との困難
を極める幕
末外交の矢
面に立つま
では、函
館（以下鋤
雲在住時代

については「箱館」を用いる）における十年の雌伏期間があった。
幕府の奥詰医師として製薬局に勤務していた嘉永五（一八五二）
年、オランダから寄贈された幕府の汽船観光丸の試乗に応募し
たかどで医官長・岡櫟泉院の譴責を受け、事実上左遷されてい
たからである。出発に臨んで鋤雲は「将に北海に移入せんとし
て慚然として作あり」と題する律詩を

一折凌雲千里翼 一たび凌雲千里の翼を折りては
不知何日更雄飛 知らず何れの日にか更に雄飛せんことを

と結んで、暗澹たる思いを洩らしているが、箱館に赴いてから
は案に相違して、地元の漢・洋医師に働きかけて山の上町遊郭
の梅毒駆除のために医学所（現・函館中央病院の濫觴）を建設
し、七重村（現・亀田郡七飯町^{ななえ}）に幕府の薬草園を模した広大



〔ジャコブ街三十二番地に現存する
イギリス・ホテル跡〕

な薬園を開
いた上、さ
らには医師
の職分を越
えて久根別
川を浚って
箱館との間
に舟運を通
し、なかん

づく八王子千人同心を中心とする無為徒食の移住諸士連にみず
から簑笠をつけ、わらじ履きで住宅を建てさせ、養蚕等の正業
に就かせている。このたぐい稀な行政手腕を買われて医籍を士
籍に改められ、元治元（一八六四）年、江戸へ召還される前
に奉行に次ぐ奉行組頭に昇っているのだが、後に箱館在住中の
見聞を津田仙（梅子の父）の『開拓雑誌』に請われ、「曉窓追録」
風の回想録に纏めたのが「箱館叢記」「七重村薬園起原」「養蚕
起原」の三篇（『宛庵遺稿』所収）である。今回の函館探訪は、
従来概して右三篇の記述が引用・敷衍されるにとどまっていた
鋤雲の故地に立って、創業の跡を偲ぼうとしたものである。

昨年パリの街を歩いてからちょうど一年目に当たる九月五日
から八日まで、今度は三泊四日の予定で函館を歩くことにした。
出発前の準備として、デジタル版『函館市史』をはじめ、イン

ターネットで検索可能な事項については、あらかじめノートを取っておいたので、あとはもっぱら現地を踏んでの探索ならびに聞き取りと決めて、当日の一番機で昼ごろ函館に着いた。午後からは駅前ホテルを出て、赤煉瓦倉庫が立ち並ぶ観光エリアでひとまず軽食をとり、ようやく人影もまばらになった郷土資料館へ行ってみた。そこはかつての金森洋物店の建物を改修して伝統的な什器調度類を展示する施設で、研究機関ではなかったが、市立博物館に電話して郷土史担当の保科氏を紹介してもらったので、ただちにタクシーで博物館に向かい、お仕事の合間を縫って幕末期の箱館、とりわけ医学所や山の上遊郭のおおよその位置を市が公表しているデジタル資料上で見せていただいた（以下、末尾「栗本鋤雲旧居周辺図」を参照）。

車椅子押す身としては、せっかく稼いだ高度を無駄にしくなかつたので、等高線上を反時計廻りに函館山ケーブルカー駅、元町公園、ハリストス教会という観光スポットを横目に見ながら、姿見坂上の医学所跡、その下の弥生町十七番地に当たる一郭にあったという遊郭跡周辺を徘徊するうちに、その日も暮れた。タクシーの運転手が明日は天気が悪いから夜景は無理でしようというので、夕食後登った函館山頂から眺め渡すと、夜景はたしかに素晴らしかったが、山全体が鬱蒼たる樹木に覆われて、百五十年前といえども「箱館山上」の旧居を探し出すのは事実上不可能と思われた。ところがである。宿へ帰って資料館でもらった観光地図をぼんやり眺めていると、前日歩いた弥

生坂をもう一段上がったあたりに「咬菜園跡」という史跡マークがあるのに気がついた。鋤雲は「箱館叢記」に「十升」という屋号の「界屋何某」という名主が開いた「咬菜園」（原文では「咬」の字に口偏に「效」と書いた「嗽」を当てているが、『大漢和辞典』に載っているのは粗食を意味する「咬菜」のみである）が「予が家の隣地」であったと記しているから、鋤雲旧居の「隣地」だったに相違ない。翌六日は、とにかく真つ先に「咬菜園跡」へ行ってみることにした。

「箱館山上」というのでにわかに現在のケーブルカー山駅付近と考えるのが、そもそも浅はかだったのである。六日はバス・電車一日乗車券を買って市内を縦横に行き来するつもりだったので、駅前



〔咬菜園降り口〕

からの高龍寺前行きバスを現地に比較的近い公会堂前で降り、基坂の旧イギリス領事館經由、前日通った元町公園を抜けて咬菜園跡を目指すと、海岸から上がってきた弥生坂の家並みがようやく尽きて、全山を覆う樹林帯が始まるあたりが鋤雲のい



〔咬菜園上〕

いわゆる「山上」のことであると納得がいった。「咬菜園」の入口を入ると、函館戦争の際、榎本武揚らの幕府軍が新政府艦隊進発との報に接してここで最後の宴を張った旨の案内板があり、鋤雲が新「界屋何某」としか知らなかった園主の名も、堺屋新三郎であることがわかった。園の命名も五稜郭を設計した武田斐三郎によ

るとあるから、もはや疑う余地はない。左脇の石段を降りた先のややもの古りた住宅では、お留守と見えてベルを押しても応答がなかったが、背後の傾斜地がどうやら旧庭園だったものと思われた。要は、鋤雲旧居が上下左右どちら側の「隣地」だったかであるが、「咬菜園」を上がったところは現在狭い十字路になっており、坂の続きは数軒先が山になっているから、左角地の真新しい民家の建っているあたりを当時「山上」と呼ぶにふさわしかった鋤雲旧居跡と睨んで、付近の写真を撮った。＊

〔後記参照〕

「咬菜園」前のかかなり急峻な坂を下り、尾根道を三〇〇メートルほど西進したところが前日徘徊した姿見坂上である。ま



〔医学所跡〕

ずは医学所跡を確認するため、今度はカメラ片手に弥生町八番地一帯を精査することにしたが、一つ先の幸坂を下って行くと、道沿いの民家が古い石垣や煉瓦塀・門柱を利用して建っていることが見てとれた。医学所は明治四年に船見町へ新築移転したというから、煉瓦塀と右片方だけ残った門柱はその後の遺構かと思われるが、八番地一帯は底辺に当たる道路沿いの家並みにも同じ石垣が垣間見えるから、六百坪あったといわれる医学所は、八番地一帯を占めていたのではあるまいか。

医学所を作ったのがそもそも、山の上町遊郭の梅毒駆除のためであったことは、さきに述べたが、前日博物館からの尾根道で立ち寄った旧公会堂の案内人から古刹称名寺の住職須藤隆仙師が函館史に詳しいと聞いていたので、もと来た道をさらに進んで、同寺の寺務所で面会を申し入れると、快く質問に答えて下さった。ご教示によれば、遊郭のあったのは前日聞いた弥生町十七番地の下の二〇番地一帯だったとのことである。頂戴した名詞によれば、須藤師は南北海道史研究会会長として『函館



〔写真 遊郭跡（十字路右前方の一郭）〕

武田斐三郎が福澤諭吉と同じ緒方洪庵の適塾で学んでいたことを知ったが、福澤生誕一七五年記念に昨年出版された『福澤諭吉事典』（四六～四七頁）では、武田は当時公刊されていた広瀬元恭『築城新法』、大鳥圭介『築城典刑』など、福澤訳『百爾（ペル）築城書』と同じペル原著からの既訳書を参考にしたと伝えられ

散策案内』『函館開港物語』等、多くの著書を公刊され、『函館市史』にも執筆されているから、よい方にめぐり会えたものがある。

一日乗車券を買ったからには、市内を将棋の飛車か香車のように飛び廻らねばならぬ。鋤雲旧居跡、医学所跡、遊郭跡がほぼ確認できたとなると、当日の目標として残るは五稜郭だったから、坂を下りたところの市電停留所「大町」から五稜郭公園前まで、都合よく一気にバスで行けたが、見渡したところ、この一軒だけと思われた井飯屋で遅めの昼食をすませたときは、優に二時を廻っていた。午前中「咬菜園跡」へ行く途中、基坂で見つけた「諸芸調所跡」の案内板から、五稜郭を設計した



〔五稜郭に復元された奉行所と赤松〕

越「麓に菜園があったという「丸山」、菜園内にあったという「字鷹ノ巣と云ふ大なる林」、移住諸士が住み着いたといわれる「藤山郷」等）について、『七重村史』はじめ各種の資料に当たって頂いたが、ついに詳しいことはわからずじまいだった。一旦宿に帰ってから、出直

るとしている。「公園」に入る橋を渡つてすぐの一郭に登ってみると、堡塁上の空間は意外に広く、武田の教えを受けた榎本武揚がここを最後の砦と決めたのもむべなるかなと思われた。堡塁上からはまた、復元された奉行所の建物が見下ろされたが、舞台の書割りのように建物を取り巻いて聳えるみごとな赤松こそは、鋤雲が佐渡から取り寄せた苗木がここまで立派に育ったものである。園丁に聞けば当時からのものが八十八本あるが、一本枯れて八十七本になったとのことである。

五稜郭を出てからは、同じ五稜郭町内にある市立中央図書館の郷土資料部で、出発前インターネットで調べてもわからなかった旧七重村関連の地名（七重村の東の境界とされた「藤山



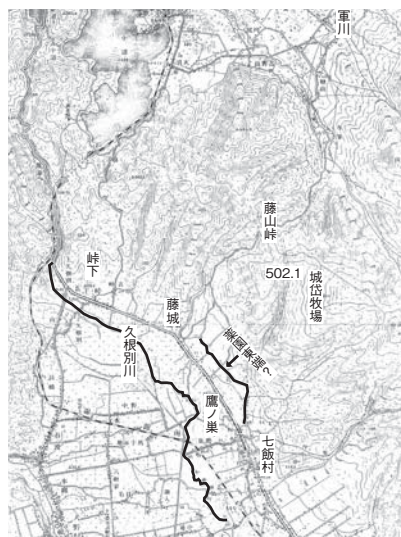
〔赤松街道の松〕

して函館ビールまで歩き、翌日の成果に期待した。

七日朝は駅前に予約してあったレンタカーを借りて、とりあえず七飯町歴史館を目指し、前日電話しておいた学芸員の山田央氏にお会いすることにした。道は大沼公園に通ずる国道五号線にとつたのは、

全国の道路百選に入ったと地元で喧伝される通称「赤松街道」の松の生育ぶりを写真に収めたかったからであるが、鋤雲の時代に植えられたのは、七飯町に通ずる旧道の方だったと山田氏から聞いて臍を嚙んだ。ともあれ、赤松街道の松も鋤雲が取り寄せた苗の兄弟か子孫であることに変わりあるまい。

七飯町に入って役場入口の交差点を右折すると、左手の庁舎周辺に杉の木立が散見するのも、往時を偲ぶよすがといえようか。歴史館では午後から出張されるという山田氏に大正四年測量の五万分の一地形図「大沼公園」を出して頂き、旧七重村葉園の東端は七飯岳の中腹城岱牧場の山裾を限る細道（現在の地図と重ねると函館本線下り線とほぼ一致する）だろうとのこ



〔旧七重村葉園周辺地図
（大正四年測量五万分の一地形図）〕

教示を得たが、鋤雲の跡を尋ねて七飯町までやって来た者はこれまでもこのこ

とだった。旧地形図にはさらに、図書館の調査でもわからなかった「藤山越」が「藤山峠」として軍川方面へ通ずる山道に記されており、帰宅してからインターネットで調べると、役場前から山に入って城岱牧場経由、軍川へ抜ける道路がどうやらその山道と交差するようである。次回函館を訪れる機会があったら、「藤山越」からの旧七重村を俯瞰してみたいと思う。だが、なんといいっても七飯町での第一の収穫は、葉園の中心にあったかと思われる「鷹の巣」の地名が、函館本線の分岐点に近い上り線の東端に見つかったことであり、とにかく現地へ来てみるものだとの思いを改めて強くした。

昼ごろ歴史館を辞し、国道沿いの手打ち蕎麦屋で昼食を済ませると、下り線のガードをくぐって鷹ノ巣地区を目指したが、途中工事で道路が封鎖されていたため、南廻りに迂回して行ってみると、上り線際の現地は、後で聞くとチューリップや野菜



〔旧鷹の巣地区。中央は丸山か？〕

はないとのことだったが、歴史館でコピーを頂戴してきた大正四年測量の地形図をよく見ると、城岱牧場の西に五〇二・一メートルの無名峰があり、その山裾を限るのが今は函館本線下り線となった先述の細道だとなると、「丸山」とはおそらくこの峰のことであろう。

のハウスが立ち並ぶ農村地帯で、ところどころに点在する木立が往時の「大なる林」を思わせた。

とにかく現地を踏むという方針で出て来たので、旧七重村の「西は峠下」とある峠下小学校あたりまで行って写真を撮り、帰りは「養蚕起原」に、上州伊勢崎から「ちか」という女性を呼び寄せて「八丈縮緬」などを織らせる「機所」を作ったといわれる旧・大野村地区を廻って、国道沿いの藤城地区（「藤山郷」があったといわれる）へ戻ったが、その間とどこころに車を止めては七重村薬園がその麓にあったという「丸山」らしい山容を写真に収めた。今でも地元で「丸山」と言い慣わしている山はありませんかとの問いに、歴史館の山田氏も心当たり



〔久根別川（七飯町地区）〕

を東久根別駅手前の河口まで行ってみた。橋の袂から殺風景な堤防沿いを河口まで歩いて、なるほどここから「独臚片帆直に」函館へ向かったのかと、市街を遠望し、今回の探訪を切り上げることにした。日が落ちるにはまだ間があったので「亀田村八幡祭礼に跑馬会あり」

車を使ったこの日の最後の予定は、鋤雲が建議して函館までの舟運を通した久根別川を実見することだったので、七飯駅下の橋まで行ってみたが、最近の護岸よりも古い石組みがもしや当時の浚渫の跡では…と期待したが、山田氏に問い合わせると明治以後のものとのことだった。たしかに鋤雲自身「疎通の功は唯浅淤を浚ひ 偃木を伐る迄に止りたれば云々」と言っているから（「七重村薬園起原」）、そのとおりなのだろう。

久根別川の下流は七重村から「三里にして有川村に至り、有川と合して海に入り、箱館へ独臚片帆直に航して至るべし」（同右）とあるので、海へ出るところまでは見とどけようと、国道を亀田八幡近くの交差点まで南下して、七重浜沿いの松前街道



〔久根別川河口(左方が函館市街。正面は函館山)〕

〔「箱館叢記」〕と往時の賑わいが伝えられる八幡宮に立ち寄り、車を帰してから、駅近くの居酒屋で今回の旅を締め括った。

*〔後記〕函館より帰来後、表札の出ていた「咬菜園」のご当主原眞人氏に書信で問い合わせたところ、思いがけず長距離電話でお返事があつ

た。園主の養子で、道議や商工会議所会頭、衆議院議員も勤めた平出喜三郎から数えて四代目に当たる方で、「咬菜園」は多分料亭だったろうとのこと。その後送って頂いた資料や再度のお電話の内容を総合すると、どうやら鋤雲旧居の最有力候補は、「咬菜園」下のマンションのその下、現在「函館庵」という宗教法人になっているところで、上記須藤師の『函館散策案内』(昭和四十七年)によれば、明治期には伊勢神宮の末社があったという。元町公園の入り口付近には「奉行所跡」の標識が立っているから、してみると私が初日と二日目と偶々二度歩いた弥生坂までの等高線上の道は、鋤雲の日頃の通勤経路だったことになる。



〔栗本鋤雲旧居周辺図〕